

自然とふれあう野外活動のすすめ

瀬沼克彰

1. 幼児体験の重要さ

成人の生きがいや自己実現を主たる研究領域としていて、近頃、つくづく考えさせられるのは、幼児体験の重要さということである。特に、人間の一生の中で結実期であり、本來、静かな豊かさの中での生の燃焼が燃えつきる老人の日常性

を観察すると、その感が強い。経済的な自立と健康維持が何にも増して重要なことは、今までもないが、この二つの面においてめぐまれた生活をしているにもかかわらず、第三のあり余る自由時間ももて余してしまっている人が何と多いことか。

第三の余暇の充実がなければ、前の二つの条件が、いくら整っていても、生きがいや自己充実は、感じられない。くる日もくる日も、なすこともなく、友人とムダ話をすることもなく、テレビの前に、ただ座っているという悲しい存在にな

り、さて、幼児の遊びについて書くにあたり、いきなり、私は、数十年後の老齢期より話をスタートさせた。それは、時々の私のくせであるが、対象を考察するに当たり、最終段階から逆もどりして対象をながめるという方法を本稿でも取つておきたい。

そこで、ふたたび、老人の話にもどると、多くの人々が、余暇の充実を行う知識と技術に欠けている。或いは、かつては、両方とも持っていたが、数十年にわたる官仕えと仕事にありまわされる生活の中で、どこかへ、それらを置き忘れてしまってきたことになる。気がついた時には、生活を支える

資金と幸いなことに身体だけは健康にめぐまれたが、老後は、何をしたらよいかわからないということになってしまつた。

こうした多数派に対し、現在では、少数派に属するが、

子ども時代から、好きなものをひそかに温めて、長い人生の中で、時間をかけて育ててきた人もいる。彼らは、たとえ、職場の中での地位が、若干低かろうが、年収が、少し位、安かつたとしても、老後において、はるかに、前者よりも、生きがいのある人生を過ごすことができるとは間違いない。

両者は、一体、どこで、どう差がついていくのであらうか。私は、幼児の世界の専門家ではないので、幼年時代についての詳しい知識は、そんなに持っていない。しかし、青年期以後の多くの人々の手記、体験記、作文などの資料、調査の過程で行う面接、ヒヤリングなどを通じて思うことは、成人以後の生活志向と意識の原点が幼児の時代に形成されていることを見出すことが多い。(拙著『余暇と生涯教育』学文社) 文学の世界では、好んで扱われているテーマであるが、幸せな幼年時代を過すことが、人生で幸福を見出す最善の道だということは、私の専門領域でも真理である。幼児期に、何か好きなことに夢中なること、思い切り、遊びまわること、友達と、どこか遠くの野山へ出かけて帰りが遅くて、両親にしかられること、等々、あげれば切りがないが、こういうことが大切だと思う。

2. 遊びを奪われた子ども達

現在、六〇代、七〇代の老人達の多くは、右のような経験を一つや二つは、かならず持っているだろう。「まったくない」という人は例外であろう。また、私が本稿で、一番いい野外活動のすすめということに関して、野山をかけずりまわり、小川で魚取りをしなかつた人も少いであろう。

だが、老年期になると、多くの人は、そうした幼児体験は、長い年月の中で風化し、原形をとどめず、あとかたもなく、どこかに四散してしまう。そして、ほんの少数の人のみが、それを温く育て上げ、ほんもののものとして自分の中で生きづけるということになる。よく言われることだが、人生は、かくも残酷である。

ところで、現在の子ども達は、どうであろうか。極論になかかも知れないが、かつてのように、幸せな幼児体験を持つことのできる子ども達は、何%位いるのであらうか。もの心がつく以前から、間違つても彼らの関心や興味をひくはずもないパズルや、命令されて書かされる「お絵描き」、何の役に立つか、まったくわからない習字、日本語も、わからないというのに、英語のレッスン、そこらをとんで遊びまわりた

くてしかたがないのに、毎週、通わざせるピアノ、ヴァイオリンのおけいこ事、等々、で形づくられている。

己満足のための犠牲になつてゐる子ども達の姿だけがうかんでくる。高度成長経済は、子どものスクールビジネスの開花を可能にした。親は、子どものためとあらば、何をも犠牲にすることをいとわない。

特に、母親の志向が、そこへいつている。それを、社会的経験の豊富な父親が、権威を持つて止め、本来の子どものもつ自発性ややる気に援軍を出してやらないのだから、何をかいわんやである。親と子の犠牲の図式がここに成立し、遠からず、破たんがやってくることは間違いない。

個人の家庭で、破たんがやってきて、子どもが、けいこ事を拒否するとか、塾へいくことをやめるのは、たいした問題にはならない。これが、こうじて登校拒否になつてくると、一家庭の問題だけではなくなつてくる。問題は一段と深刻になつてくるわけである。

こうした問題も、たしかに大きい問題である。しかし、私は、幼児時代から欲求不満のかたまりのような精神構造をもつた子ども達が、これから成長して、成人に達し、中高年に

なつていた遠い行末のことが気がかりでならない。現在の中高年とは、もちろん人間類型において、異人種と呼んでいい人々が社会を構成するようになる。

しかも、社会は、コンピューターの支配する脱工業社会である。自由時間の増大は、その極に達し、人間は、それら空白の時間を有効に活用することができるだろうか。怠惰と退屈の真中で、文化は、どうなつていくのか心配でならない。

3、大切な自然とのふれあい

現代の幼児の世界を、私は、少々、ペシミスティックに描き過ぎてゐるのだろうか。多くの大人達の余暇をみていて、なぜ、日々の気ばなしにしか、それを活用できないのかと思う。そして、その答えは、子ども時代における創造的余暇の価値について正しい認識を植えつけさせる以外に方法がないと思う。余暇教育は子どもの時代にこそ力を入れなければならぬと強調したい。

本年三月、私のこうした主張は、幸いなことに、東京新聞の「この人」とNHK「朝のロータリ」に取りあげられることになつた。そこで、一つの提案として、親も教師も、だまされたと思つてやってみてくださいと次のように語つた。

「子どもの世界から自然や遊びが奪われて、人間形成がゆ

がめられているのです。この文明病から子どもを回復させるには自然の中にはうり込んでやることが重要です。」

さしづめ、夏休みが、最も適しているのであるから、野外活動の体験を一人でも多くの子ども達に味わってもらいたい。たとえ、二泊三日のプログラムでも、たえて久しい子ども達の「目ののかがやき」の違いに注目させられることは間違いない。

子ども達から生き生きとした表情と、喜びをかみしめる顔というものは、近年、お目にかかることが少くなっているようである。日常生活圏での活動も、大切であるが、一年のうちに数回は、自然との接触を通じて、日常性から脱却しないことは、荒廃した子ども達の心は、本来の人間性にもどらないのではないだろうか。

私は、かつて、H・T・ペイリーを引用して、自然に親しむことの少い子供は大人になつても、自然、書物、小説、歴史、詩、絵、音楽などのほんとうの良さを味わうことができない、と書いた。(拙著『余暇教育の設計』文和書房 昭和五二年) 子どもと自然とのかかわりを説いた現代への警鐘の一つと

して重要であると思う。

ペーリーのいう自然という概念を、私は、"ほんもの"と理解している。子ども時代ほど、"ほんもの"にふれさせ、"ほんもの"を見せなければならない時期はない。現代は、清水幾太郎氏もいう如く、余りにもコピーのはん乱した社会である。けいこ事、塾の多くの部分、テレビ、雑誌、絵本、レコード、等々、コピーが満ちあふれている。

人間、まして、幼児は、コピーでは、感動し、深く心を動かされることは少い。しかし、人間形成にとって最も大切なことは、私は感動だと思う。自然の世界には、コピーもにせものも存在しない。あるのは、すべて、"ほんもの"だけである。

夏休みこそは、子ども達を、虚飾のない"ほんもの"の大自然の中で過してもらいたい。自然という最大の教師から多くのことを学んで欲しい。そのために、先生方親達が協力して、その体制をつくって欲しいと思う。

(財日本余暇文化振興会)